共感に関する研究 (5) ——あいまい性 (1)

山岡　哲雄

I

一般に具体的な性質を備えた対象からは，その対象の性質を理解することは容易であるが，抽象的な対象からは，その対象の性質を理解することが難しい．そのため，抽象的な対象を理解しようと努める場合，人は何らかの形で，その抽象的な対象を自己の体験や感情で補って理解しようとする傾向が生ずる．このような操作が，所謂，感情移入をひきおこすことは広く知られた事実であり，プロジェクティブ・メソッドによる心理テスト，例えば，ロールシャッハ・テスト，TAT 等は，その代表例である．このようなテストで用いられている対象図形は，所謂，多義図形であって，ロールシャッハ・テストのインク・ブロットは，無意味な偶然的図形であり，TAT の場合には，比較的具体的な絵画ではあるが，その意味解釈に際して，見る人によって多様な解釈を許す自由度をもっている．この共感に関する研究(1)で行なったムンクとシャガールの絵に対する被験者の反応においても，やはり同じ効果が観察された．つまり具体的な絵では，被験者の感情移入が行なわれる．抽象性は必ずしも多義性と同じではないが，具体性が備わっていないために，受容者に様々な解釈を許すという意味では多義性と関わっている．ここでは，この多義性を，あいまい性 (ambiguity) の視点から検討を加えたい．

II

あいまい性は，国語辞典によれば「あいまい〔曖昧〕①はっきりしないこと．

「――模糊」(あやふやなこと)，②いかがわしいこと．――や，いかがわしい稼業．売春婦を置いている家．」(岩波・国語辞典 p. 3)，「〔曖昧〕はっきりしないこと．――や〔曖昧屋〕淫売婦をかかえておく家．あいまいやど．」(広辞苑 p. 6) となっている．この内，ここで問題としようとしている語義は，「はっきりしないこと，まぎらわしいこと」の2つが最も近い．

心理学辞典では，独立した「あいまい性」という項は出てこない．あいまい性の英語にあたる Ambiguity との関連で，ambiguity figure (多義図形)「コウモリとも見え，チョウチョウとも見えるように，いくつかに解釈できる図形．心の内部の傾向をさぐる投影法にも用いられる．」(岩波小辞典・心理学，p. 140)，同種の記述は，平凡社・心理学事典 p. 374，ミネルヴァ・心理学辞典 p. 250 にもあり，多義図形又はあいまい図形という語があてられ，これには更に，反転図形や錯視の現象もこの中に含めている．岩波小辞典 p. 1 には，「あいまいさの寛容」(ambiguity tolerance) という項があり，あいまいさの不寛容の対語として説明されている．この語は，「はっきりしない事態に当面して感情的に無理な決定」をせず，「すべてを『白黒』と割り切って」しまわない態度であるとされ，「あいまいさの寛容を測定するために，《イヌ・ネコ・テスト》(dog-cat test) が考案された」とある．「これは，イヌからネコまで少しずつ移動させてゆく絵をみせてイヌかネコかを判断させる」もので，この移行の過程の一時期に，イヌとネコのあいまい図形又は多義図形が出現するはずである．このような語の説明からは，あいまい性の心理学的定義は，十分とはいえないが，少なくとも，多義性という点で一致する．心理学におけるあいまい性の研究は，従来，視覚の図形に関するものが殆んどであったようであるが，他の心理学的領域にも，あいまい性と関連した領域があり，そこには同じ原理が働いていることが想像される．

最近，言語学や心理言語学の領域で，あいまい性が議論されることが多いので，言語学的定義も吟味しておくことにする．研究社・新言語学辞典によれば，「ambiguity (あいまい (性))，構造言語学で問題になるあいまい性は，構造上のあいまい性である．構造上のあいまい性というのは，外見上は同一であ

る語結合が，2つの同時に可能な，相異なる階層的構造と異なる意味を持っているような場合に生ずる．多くの場合，構造上のあいまい性は，文脈あるいは音調などによって解消する．……」(p. 20)．Kenneth B. Solberg (1975) は，P-marker の説明の中で，英語におけるあいまい文の例をあげて説明している．つまり「ある文は，統語的にあいまい (ambiguity) である．例えば，*They are eating apples.* という文において，*eating* は *they* が行なっていることを指定する動詞の部分であるのか，又は *eating* は，*apples* のタイプを述べている形容詞であるのかはっきりしない[1]．P-marker はその文の P-markers が *eating* の意味がどちらに向いているかによって異なるので，そのようなあいまいさ (ambiguities) を区別するのに役立つ．」(p. 322)．更に彼は変形文法の説明の中で，「句構造文法によっては扱いえない統語的あいまい性」の例として "*The shooting of the hunters was terrible.*" という文をあげている．この文では，「"*hunters* (狩人たち)" は "*are shooting* (射っている)" のか，"*hunters* (狩人たち)" が "*are being shot* (射たれている)" のかはっきりしない」(p. 323) という．

この種のあいまい文は，Chomsky らの生成変形文法の学者が，自説を説明する際に好んで用いるのでこの他にも幾つもの例をあげることができる．

Ⅲ

これとは別に，Johnson-Laird (1969) は，やはり言語的あいまい性の問題ではあるが，幾分異なった視点から，あいまい文を取り扱っている．彼は2つの数量詞をもった文では，数量詞の語順が，文の意味に重大な影響を与えることに注目した．1つの文で，その中に含まれる2つの数量詞の位置を効果的に変える方法には，態 (voice) の変換が考えられる．能動態 (active voice) から受動態 (passive voice) へ，又はその逆の変換を行なうと，主語と目的語が位置を変え，それに従ってこの主語と目的語を限定している数量詞も同時に位置を変える．彼は次のように論じている．「能動態と受動態とが常に同義 (syno-

mynous) であるかどうかについては，様々に議論されている (cf. Chomsky, 1957, 1965, Katz と Postal, 1964, Ziff, 1966, Katz と Martin, 1967). それは部分的には，本当らしい (probable) 解釈とありうる (possible) 解釈とを区別しえないために生じているようだ．例えば，数量詞をもった文のこの対を考えてみよう．

(1) All philosophers have read *some* books.

(2) *Some* books have been read by all philosophors.

この２つの文は，文脈から切離されると同じようにあいまいである．これらの文は(a) all philosophers have read some books *or other*. (すべての哲学者は，どれか何冊かは本を読んでいる）という意味も，(b) all philosophers have read some books *in particular* (すべての哲学者は，特別の何冊かの本を読んでいる）という意味をももっている．こうした解釈が同じ位本当らしいのではない，ということは直観的に分る．文(1)は解釈(a)を，文(2)は解釈(b)を受け入れる方が妥当であると思われる.」(p. 1).「どの解釈が似つかわしいかは，語順によって決定される．１つの文の中で最初に来るものは，後に来るものよりも強い印象をもって受容される (cf. Johnson-Laird, 1968, a, b). だから最初の数量詞は技術的な意味で，第２の数量詞を拘束するだろう.」(p. 2). つまり前述の２つの文は，(1)能動態と，それに対応した(2)受動態の文であり，本来同じ意味を表わす２つの文形であるが，all と some という２つの数量詞の位置関係が入れかわったことによって，文意が異なってくる．(1)の文の some は一般的意味しかもたないが，(2)の文の some は，極めて限定された特殊な意味をもっている．つまり「その文の中に数量詞が１つしかないときは，そのあいまいさは，大したものではない，しかし２つかそれ以上の数量詞があると，そのあいまいさは決定的となる．“some” が最初にきたときは，その語順についての仮説に従って，かなりな強調として受容されるだろう．この強調は，“some or other” (不特定なもの）よりもむしろ，“some in particular” (何か特別なもの）とより一致する，なぜなら，強調は，漠然とした一般性よりも，むしろ特殊性を表わす傾向があるからである.」(p. 2).

Johnson-Laird は，こうした考えを実験的に証明しようとして，24名の大学生（心理専攻，男14名，女10名）を用いて論理的複文の真偽をあるシステムに従って判別する実験を行なっている．２つの数量詞の関係は，表１に示すような12対の位置関係であるが，実際には，この内，表１の１～８の８つの形式が用

表-1[2] Twelve basic quantified "two-place" relations

1.	$(x)(Ey)(xKy)$	Every man knows some woman (or other).
2.	$(Ey)(x)(xKy)$	Some woman (in particular) is known by every man.
3.	$(y)(Ex)(xKy)$	Every woman is known by some man (or other).
4.	$(Ex)(y)(xKy)$	Some man (in particular) knows every woman.
5.	$(x)(Ey)-(xKy)$	Any man does not know some woman(or other).
6.	$(Ey)(x)-(xKy)$	Some woman(in particular) is not known by any man.
7.	$(y)(Ex)-(xKy)$	Any woman is not known by some man (or other).
8.	$(Ex)(y)-(xKy)$	Some man (in particular) does not know any woman.
9.	$(x)(y)(xKy)$	Every man knows every woman.
10.	$(x)-(Ey)(xKy)$	No woman is known by any man whatsoever.
11.	$(Ex)(Ey)(xKy)$	Some man knows some woman.
12.	$(Ey)-(x)(xKy)$	Some woman (in particular) is not known by every man.

(Ej) denotes the existential quantifier, (j) denotes the universal quantifier, and "—" denotes negation. It is assumed that x ranges over men, y range over women, and K denotes the relation of "knowing".

いられた．この形式は素材が，極性 (polarity) ——その文は肯定文か否定文か——，態 (voice)——その文は能動態か受動態か——，語順 (word order)——"some" は，その文の文法的に（表層的に）主語にあるか，目的語にあるか——，という３つの変数を研究するために選ばれている．彼は更に，これにもう１つの理由を加えているが，それは，従来の心理学の研究で，推理等を研究する際に，こうした言語学的形式が，推理の効果の判断に影響していたはずであって，こうした要因も研究対象として考慮に入っていた．上の８つの論理的形式に対して，そのそれぞれの論理的形式毎に，語い的効果を減ずることを目的として表２のように，それぞれ語いを入れかえた８つの文を用意する（これは，名詞のタイプ——例：人間，抽象等——その文の可逆性，つまりその２つの名詞は意味的変則性 (semantic anomaly) なしに相互交換できるかどうか

表-2[8]

(a) Every man knows some woman.
(b) Every car overtakes some bus.
(c) Every job requires some skill.
(d) Every child loves some toy.
(e) Every brother hates some sister.
(f) Every liquid dissolves solid.
(g) Every medicine cures some disease.
(h) Every animal possesses some instinct.

——を変えるため (cf. Slobin, 1966) に選ばれた).

実験の結果は，表3と図1に示す通りであるが，予想通り2つの数量詞の出

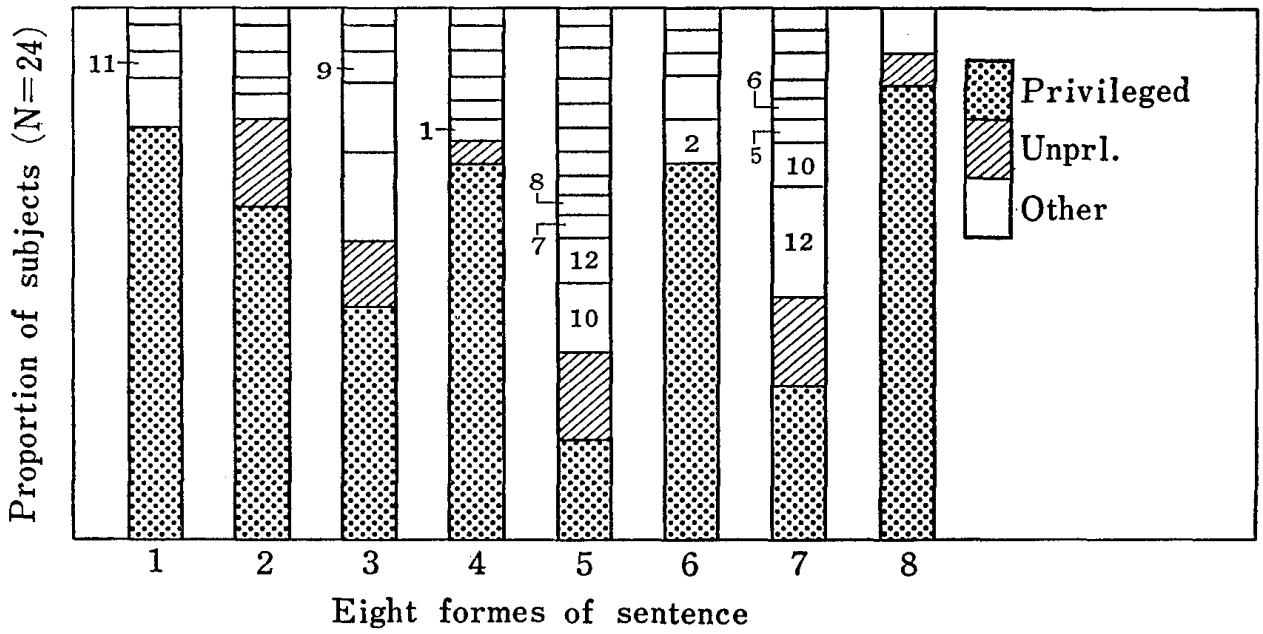

図-1[4]

表-3[5]

	Affirmative				Negative				
	Subject		Object		Subject		Object		
	Active	Passive	Active	Passive	Active	Passive	Active	Passive	
Sentence no.	(4)	(2)	(1)	(3)	(8)	(6)	(5)	(7)	Overall
Mean departures from privileged classifications	0.8	0.9	0.4	1.1	0.3	0.9	2.4	2.3	1.1
Mean classification times (sec.)	40.2	44.6	44.5	52.4	50.7	48.0	64.5	74.4	52.4

現順序が，能動文とこれに対応した受動文とを，異なった文意に解釈させる決定的効果をもつことを示している．つまりあいまいな文を理解する過程で，その文をある解釈に向かわせる働きは，語順によって決まるものであると考えられる．

もちろん，英語では，語順の役割が大きいが，日本語の場合には，語順は割合ルーズであることを考えると，これほどはっきりとした効果は期待できないだろう，と思われるが，後述する理由で，日本語でも語順の効果は無視しえないものがある．

Johnson-Laird の研究では，文脈から切離されたあいまいな文の解釈を，ある一定の方向へ向ける働き——つまり多義的な文の解釈に際して，ありうる又はもっともらしい幾つかの解釈の中から，1つの解釈を人に選ばせる働きをする要因は，語順，特に数量詞の位置であると考えられたが，このような決定過程を別の視点から検討することもできる．

Ⅳ

Yates と Zukowski (1976) は，人の意志決定過程とあいまい性との関係を実験的に研究している．ここでは，彼らのあいまい性に関する議論を主として紹介しておこう．

彼らは「あいまい性 (ambiguity) とは，様々な事象の生ずる機会についての漠然とした情報を，決定者が処理する際に生ずる不確実性の1タイプである」(p. 19) と定義している．つまり，彼らは，あいまい性の問題を人の意志決定の際の確率の問題としてとらえ，その際実際の現実に生じうる確率と，そのような確率事象に対して，決定者がどの程度事実を知っているか，又は無知であるか，という両者の関係としてとらえているもののようである．つまり，人がある決定をする場合に，完全にその決定の結果の成り行きについて，あらかじめ知っているということは滅多にない．その意味で，その決定に関して不確実性が含まれていることは明らかである．しかし一方，全く完全にその決定に関

してどのような結果が生ずるかについて知らない，ということも滅多にない．このことを彼らは Ellsburg (1961), Milmor (1954), Luce と Raiffa (1957), Cooms, Dames と Tversky (1970) らの考えにもとづいて次のように説明している「あいまい性は，不確実性の他の2つの水準，つまり危険と無知と対照的であるので容易に理解できる．決定状況は，もし決定者が，彼の選択の最終結果がどうなるかをはっきりとは知らないが，彼が実際に起るはずの結果の相対的機会については，極めてまとまりのある意見をもっているときには，危険があるといわれる．ある危険な決定選択の簡単な例としては，プレイヤーの運命が，1枚の貨幣を投げることによって決まるようなギャンブルがある．恐らく賞金と損失に関して，彼のチャンスについての意見は，その貨幣の対称性や過去の無数の貨幣投げの経験にもとづいているのだろう．ある選択が，もし決定者が，彼の選択決定によって，何が起るかについて，その潜在的結果を全く予想せずに判断したとすれば，その決定は無知にもとづいてなされたのだといえる．あいまいな決定状況は，危険と無知との両極の間にある．殆んどすべての不確実な決定が，何らかの程度にあいまいさを含んでいることは明らかなことであろう．滅多に生じないけれど，我々は単純な貨幣投げと同じ位はっきりと不確実性と遭遇することがある．人が，様々な事象の機会が生ずることについて，全く何も考えないような情況を想像することは非常にむずかしい．実際には単に無知を極端なあいまい性の理想化された状態とみなすのが最も妥当であろう．」(p. 19)．

このようにあいまい性と危険とを区別することによって，あいまい性をもった事象での選択決定が様々に論じられている．

Ellsberg (1961), Raiffa (1968), Brownson (1964) らによってこの問題は様様な視点から論じられている．「人は決定状況において，あいまい性の出現にどう反応するか」という問題に対して「Becker と Brownson (1964) による実験的事実を，Ellsberg (1961) のかなり非公式な観察と組合せて考えると，あいまい性は一般に回避されていることが示唆される，つまり，その中に含まれるあいまいさの程度を除けば，全く同一であるような2つの選択を与える

と，人はあいまい性の少ない方を選ぶ傾向がある」(p. 20)．あいまい性を Ellsberg (1961) は，「情報の総量およびタイプ，信頼性，合意に依存し，且つ比較的ありそうなことの推定における『信頼』の程度，人のある程度の信頼をひきおこす性質」として一般的な方法で述べている．Becker と Brownson (1964) は，Ellsberg よりももっと厳密にあいまい性を定義しようとして「点推定以外の確率分布」と定義している．Yates と Zukowski によれば，Ellsberg や Becker と Brownson らの見解は，総じて「あいまい性の特徴が，主観的2次確率分布，つまり確率の主観的確率を扱う何ものかをもっているという主張」から成り立っているという．そしてこの関係を簡単な図によって説明している．

「分りやすくするために，ある特殊な選択の2つの考えうる結果しかないよう

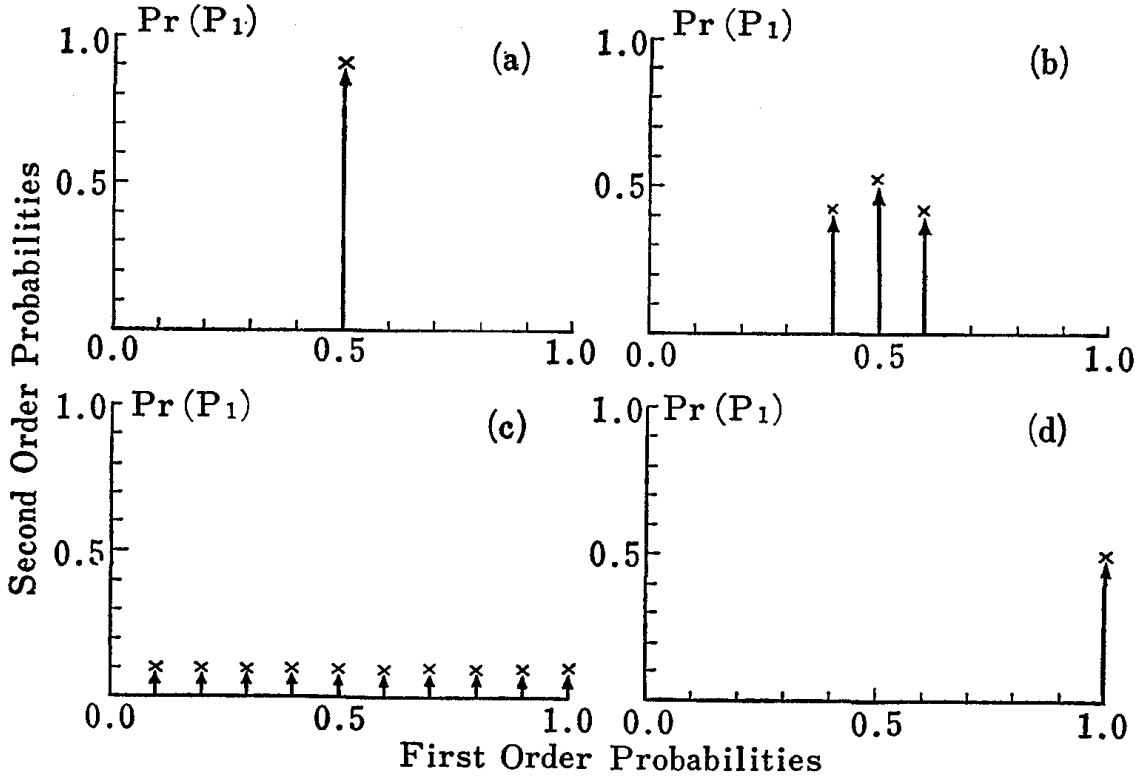

図-2[2] **Examples of discrete second order probability distributions.**

な決定状況を考えてみよう．もしその決定者が結果1の起る確率 P_1 について彼の推定が絶対確実であると信じているとすれば，我々は彼の推定は点推定であるというに相違ない，そしてその決定は危険な状況のもとで行なわれると考えるだろう．図2のパネル(a)は，$P_1=0.5$である点推定に関する，そこで生じ

た全体的関数を説明したものである．そのすべてが0.5に集中している．一方パネル(b)に図示されているように P_1 に関する2次確率分布を仮定しよう．この場合には，決定者は $P_1=0.5$ であることを殆んど信じていない．それが P_1 は0.4の値も，0.6の値をとりうることもありうると感じている．結果1についての彼の意見は明らかにあいまいである．パネル(c)は，すべての P_1 の値が，同じように等しいような，P_1 に関する一様に離散した2次分布の場合を示したものである．最後のパネル(d)は，P_1 が0.0又は1.0のどちらにも等しい極端な例を示す．すべてのケースで P_1 の期待された値は 0.5であることに注意されたい．Savage (1954) の不確実な決定行為に関する主観的に期待された効用処理の説明によれば，このような例では，その人は $P_1=0.5$ であるかの如く行動する．」(p. 20)．

Becker と Brownson (1964) は，「彼らの実験に際して，あいまい性は，ある事実の相対頻度確率の2次分布の範囲であると操作的に定義している，その分布の範囲が大きいほど，あいまい性も大きくなる．他の研究者 Toda と Shuford (1965), Lee (1971) も，あいまい性は，主観的2次確率分布のちらばりに関する別の測度，例えばその分散と同じであろうということを示唆している……．」(p. 20)．

あいまい性の定義，操作については以上にみてきた通りである．ここでは，次に，日本語におけるあいまい文の分析から始めたい．

V

我々が日常，読み，書き，話し，聞いていることばは，よく観察すると極めて不完全であり，あいまいな表現が多い．日本語では，婉曲な表現が好まれること，同音異義語が多いことが，あいまい性を更に大きくしている．それにもかかわらず，あまり不自由を感ぜずに，コミュニケーションが比較的円滑に進行しているのは，メッセージであるあいまい文の両端にある人々（話し手と聞き手等）が，お互いにこれを自己の，又は社会的関係の文脈の中にはめこん

で，不足分を補っているからであると考えられる．もちろんある文が独立で用いられることは少ないから，そのメッセージの多くの脈絡の中で理解される面も非常に多い．あいまい文は，広義の文脈の中でその殆んどは正しく理解されている．心理学の問題としては，むしろこの文脈の構造が興味の対象となる．孤立した文は多義的で，そのどの意味解釈も同じ位確からしさ（又は不確実さ）をもっている場合でも，受手は大抵の場合，その場の状況や彼のこれまでの経験から，その中の最も適切な解釈を選択する（こうした問題は，情報理論の冗長度などの問題とも関係があるものと思われる）．

あいまいな文は，我々のまわりの至る所に見出されるけれども，非常に独特な現われ方をする例として，新聞記事の見出しの吟味から始めたい．新聞記事は，スペースを節約して短かい文で多くの情報を読者に伝えようとする．その記事の見出しは，まず人目を引きつけ，次に記事に書かれている具体的説明を印象づけようとするので，いきおい省略が多くなるが，それは，その文がそれだけあいまい性を増加したことを意味する．だから新聞は，ある意味では，あいまい文の宝庫でもある．——見出しを見ただけでは，文意はあいまいで正確には分らないが，記事の本文を読んだあとで，納得する．このプロセスは見出しに対する共感であり，不足分を読者が補って理解しているわけである．

例をあげて検討してみよう．番号の次の文は見出し原文，これに添記された文は，その見出しのみを孤立させたときに考えうるありうる解釈，その内◎印を付したものは，新聞記事の内容から，見出し文が本来意図した文意を示す．[7] 見出し文は，省略が多いので，完全な文とはいえず，その意味では「あいまい文」の本来の定義からは幾分はずれるが，ここでは心理的に多義性をもつ表現として取り扱う．

① 利益少ない途上国．

◎ a. 途上国は利益を殆んどあげえない．

b. 途上国相手では利益が少ない．

② 江川崩せるか早大打線．

a. 江川は，早大打線を崩せるか．

◎ b. 早大打線は，江川を崩せるか.

③ 日程無視のあせり.

a. 日程を無観したためにあせっている.

◎ b. 日程を無視するあせり方.

④ 党再生の道開く.

a. 党が，再生の道を開く.

◎ b. 党再生の道を開く.

⑤ 「売れない芸人育てる会」結成.

◎ a. 売れない（流行らない）芸人を育てて売れるようにする会.

b. 売れない芸人（商売で芸をしないような浮世離れした芸人）を育てる会.

⑥ もめる議会特別委の調査.

a. もめている議会特別委を調査.

◎ b. 議会特別委の調査に関してもめる.

⑦ 効果ある投資増大.

a. 効果のある投資が増加した.

◎ b. 投資増加は，効果がある.

⑧ フォード大統領逆転，五州でリーガン氏圧倒.

◎ a. フォード大統領が逆転した，五州でリーガン氏を圧倒した.

b. フォード大統領は逆転された，五州でリーガン氏に圧倒された.

c. フォード大統領が逆転したが，五州では，リーガン氏が圧倒している.

⑨ 自民追いつめる自信欠く.

a. 自民は，追いつめる自信を欠く.

◎ b. 自民を，追いつめる自信を欠く.

⑩ 規制の警官はねる.

◎ a. 規制中の警官をはねる.

b. 規制中の警官がはねる.

⑪　また日本人誘かい.

◎ a.　また日本人が誘かいされた.

b.　また日本人が誘かいした.

⑫　役所の検査はパス.

◎ a.　役所によって行なわれた検査にはパスした.

b.　役所を検査した結果はパス（合格）であった.

⑬　ロ社売込み全容図を入手.

a.　ロ社は，売込み全容図を入手.

◎ b.　ロ社の売込み全容図を入手.

⑭　出そろった野党の選挙協力構造.

a.　野党の選挙協力構造が出そろった.

◎ b.　野党の足並みがそろい，一つの選挙構造がまとまった.

⑮　保守系候補の支持調査.

a.　保守系候補が，支持調査をした.

b.　保守系候補についての支持を調査した.

◎ c.　保守系候補が，党内のどの大者を支持しているかを調査した.

⑯　親の見方変える必要も.

a.　親に対する見方を変える必要がある.

◎ b.　親が子供を見る見方を変える必要がある.

⑰　生存しなお審査中.

a.　その人は，生存しており，まだ何かを審査中である.

◎ b.　その人は，生存しており，まだ審査を受けている.

⑱　スパイは周知の事実.

a.　スパイはすでにその事実を知っている.

◎ b.　スパイされていたことはすでに知っていた.

⑲　母ら四人次々刺す，横須賀で出所男，タクシー運転手死ぬ.

a.　横須賀の刑務所から出所した男が，母ら四人を次々刺し，その内，タクシー運転手は死んだ.

◎ b. 横須賀で出所男が，母ら四人を次々刺し，その内タクシー運転手は死んだ.

c. 母ら四人が次々刺したので，横須賀の刑務所から出所した男であるタクシー運転手は死んだ.

上述した例では，殆んど，助詞の省略，語順，修飾・被修飾結合によって生じた文のあいまいさである．この内，特に助詞の省略によるものが最も多い．これは，日本語が文の構造化，少なくとも文の要素の分節化と，その関係表示の殆んどを，助詞の働きに依存していることと無関係ではないだろう．語順は，特殊な場合を除けば，助詞，特に格助語が適切に用いられている限り，それほど重大な影響を及ぼさない．しかし助詞の省略，誤用，と語順，例えば倒置とが重なると，文意は決定的な影響を受ける．例えば上例の「江川崩せるか早大打線」はその例であろう．この文は，主語に相当する「早大打線」が倒置されて文末に来る一方，格助詞「は」が省略されたものである．それは文意が通らなくなるというよりも，上に見てきた通り，文意が多義性をもつようになる．これは日本語では助詞特に格助詞が，文の分節化に及ぼす影響が大きいので，格助詞が省略されると，分節化の働きが弱まり，語の連結が修飾・被修飾関係として作用する（受手にそのように受容される）心理的傾向があるのだと考えられる．上例の「効果ある投資増大」の場合，この文は一連の修飾・被修飾による「複合したひとまとまりの語」である，という印象を人に持たせる（省略ではないが，同じ格助詞でも「の」の場合のように，この語がそう入されることによって，この効果が高まる場合もある．この「の」は適切に使えば，ある語にかかる修飾語を幾つでも種み重ねることができる）．そしてそのどの語が一連の連結した語の内で，どの語を修飾しているか，という問題が生ずる．語の相互の位置や親和性によって，時と場合によって，受手の印象が異なってくるので，幾通りもの解釈が可能となる．ちょうど多義図形や反転図形で生じたものと同じ効果が言葉の組合せの上でも生ずることが予想され，その最も純粋な形が，心理学的あいまい文といえるだろう．

日本語では，格助詞の働きによって，文の分節化，諸要素の関係が規定され

ているので，語順は割合ルーズである．このため，格助詞が省略されると，語順による意味の違いがかえって前面に出てくる．しかも，比較的，語順の解釈は，受手の自由に委ねられる形となるので，語順の影響が突然，心理学的に，意味解釈上，重大な意味をもつこととなるのであろう．幾通りもの解釈が同じ権利を主張する事態がここに生じてくる．従って，考えようによっては，日本語では修飾・被修飾関係となるような語を幾つか連結させると必ず，あいまい性が生じてくるともいえる．もちろんそれは，例外もあり，単に語の組合せの場合の数で決められるほど単純ではない．ある語は他のある語の修飾語として似つかわしいが，他のある語とはうまく結びつかない．「太郎の好きな犬」とか「お菓子の好きな犬」とはいえるが「お菓子の好きな本」とはいえない．これは，修飾される名詞が生物であるか，無生物であるかと関係している．そして上の例と関連して，「お菓子の好きな犬」の意味は一義的に決まるが，「太郎の好きな犬」の場合には，「太郎はその犬が好き」という意味と「その犬は太郎を好き」という意味と2通りの意味をもつ．この2通りの意味は，修飾・被修飾関係がどこまで及ぶかによって決まる（「太郎の好きな犬」）．このような言いまわしは，心理的多義図形，反転図形に比較的近い．

上例の19の新聞見出しに加えて，上述したあいまい文に近いものを4例加えておく．

⑳ 太郎の好きな次郎．

a. 太郎は，次郎が好き．

b. 次郎は，太郎が好き．

㉑ 太郎が好きな犬．

a. 太郎は，その犬が好き．

b. その犬は，太郎が好き．

㉒ 事故の多い自動車の運転手

a. 故障ばかり起す自動車を運転している人（運転手）．

b. 事故ばかり起している運転手．

㉓ 2つの電話による質問事項

a.　2つの電話でかかってきた質問事項.

b.　電話でかかってきた2つの質問事項.

Ⅵ

前項に列記した23種の文とその文の意味として可能な解釈文を添えて，26人の被験者（内，男13名，女13名の心理学専攻の大学生，年齢は20歳～23歳）に意味解釈の判断を行なってもらった．方法は次の通りである．

「次の文の意味として適当と思われるものに○印をつけて下さい」という説明文に続いて，前項に列記した順序で23種の文とその意味解釈とを記した紙を被験者に渡した．解釈文は a，b，又は a，b，c，の2選択肢又は3選択肢からなるが，前項で添記した見出しの本来意図した解釈文を示す◎印は付けていない．被験者は，あまり深く考えないで，それぞれの文の意味として適当と思われる方の解釈文に○印をつけるように依頼された．ここに提示した文は，理想的あいまい文とはいえないが，2，3通りの意味にとれる性質のものであるので，あまり厳密に考えると，決められなくなる恐れがある．選択肢は，各文2つずつであり，文⑧，⑮，⑲のみ，3つの選択肢をもっていた．表4，表5(i, ii) はその結果を集計したものである．表4は被験者男女併せて集計したものであり，表5(i)は男性のみ，表5(ii)は女性のみの反応を集計したものである．表中の a，b，c らんの数は，それぞれを適当な解釈とみなした被験者の数を示す．文①～⑲までの文のらんの数字の右肩に○印を付けた方の項は，見出しとして本来意味しようとしていた文の意味を表わした解釈文であることを示す．従って○印を付けた項の数が大きくて，有意であれば，この文は多義文として作用せず，被験者は，この文を書いた人の意図をほぼ，正しく読みとったことを意味する．逆に有意ではあるが，○印を付けた項の数が小さい場合には，この文は多義文とはいえないが，被験者は，この文を書いた人の意図とは違った受けとり方をしたことを意味する．選択肢間に有意な差がない場合には，この文は多義文として，被験者に受けとられたことを示す．この結果を簡

表-4 男女計

文	a	b	c	計	χ^2	文	a	b	c	文	χ^2
1	20°	6		26	7.54**	13	9	16°		25	1.96
2	4	22°		26	12.46**	14	15	11°		26	0.62
3	13	13°		26	0.00	15	23	3	0°	26	35.94**
4	10	16°		26	1.38	16	6	20°		26	7.54**
5	16°	10		26	1.38	17	8	18°		26	3.82
6	11	15°		26	0.62	18	6	20°		26	7.54**
7	8	18°		26	3.85*	19	8	14°	4	26	5.82
8	14°	9	3	26	6.97*	20	17	9		26	2.46
9	16	10°		26	1.38	21	23	3		26	15.38**
10	20°	6		26	7.54**	22	5	21		26	9.85**
11	23°	3		26	15.38**	23	7	19		26	5.54*
12	21°	5		26	9.85**						

単な表にまとめると，表6の通りである．表中の○印は，その文が多義文であったことを示し，×印は多義文ではなかったが，読む人は殆んど書いた人の意図を取り違えたことを示し（但し文⑳～㉓は，多義文でなかったことのみを示す），※印は，読む人は殆んど書いた人の意図を正しく理解したことを示す，従って○印と×印（但し文⑳～㉓を除く）とは，意味は幾分異なるが，あいまい文とみなしうる．

表の結果から見る限り，ある文の読み取り方には，比較的男女差が大きく，男性よりも，女性の方が，ここに示した意味を正しく理解する比率が大きいことが分る．このことから直ちに，女性の方が察しが良い，と判断することはできないが，その可能性は，十分ありそうに思われる．

文①～⑲で用いた新聞見出しは，すでに報道されたものばかりであるから，被験者は何らかの形で過去の知識として情報をもっており，文解釈の判断にその知識を活用したものと思われる．しかしその割には，見出しが意図した文意と異なる解釈が多かった．新聞報道時には，これらの見出しを読んで，殆んど

表-5

	(i) 男					(ii) 女				
文	a	b	c	計	χ^2	a	b	c	計	χ^2
1	10°	3		13	3.77	10°	3		13	3.77
2	3	10°		13	3.77	1	12°		13	9.31**
3	9	4°		13	1.92	4	9		13	1.92
4	5	8°		13	0.69	5	8°		13	0.69
5	9°	4		13	1.92	7°	6		13	0.08
6	6	7°		13	0.08	5	8°		13	0.69
7	4	9°		13	1.92	4	9°		13	1.92
8	7°	3	3	13	2.48	7°	6	0	13	6.62*
9	8	5°		13	0.69	8	5°		13	0.69
10	12°	1		13	9.31**	8°	5		13	0.69
11	12°	1		13	9.31**	11°	2		13	6.23*
12	11°	2		13	6.23*	10°	3		13	3.77
13	9	3°		12	3.00	0	13°		13	13.00**
14	9	4°		13	1.92	6	7°		13	0.08
15	12	1	0°	13	20.62**	11	2	0°	13	15.96**
16	5	8°		13	0.69	1	12°		13	9.31**
17	2	11°		13	6.23*	6	7°		13	0.08
18	3	10°		13	3.77	3	10°		13	3.77
19	3	6°	4	13	1.08	5	8°	0	13	7.60*
20	8	5		13	0.69	9	4		13	1.92
21	11	2		13	6.23*	12	1		13	9.31**
22	3	10		13	3.77	2	11		13	6.23*
23	3	10		13	3.77	4	9		13	1.92

誰も，意味不明とは考えなかったはずである[8]．その同じ文を記事から切離して，その文のありうる解釈を列記した上で，文意を求めた結果では，上述の通

表-6

男	男　女	男	女	男	男　女	男	女
1	※	○	○	13	○	○	※
2	※	○	※	14	○	○	○
3	○	○	○	15	×	×	×
4	○	○	○	16	※	○	※
5	○	○	○	17	○	※	○
6	○	○	○	18	※	○	○
7	※	○	○	19	○	○	※
8	※	○	※	20	○	○	○
9	○	○	○	21	×	×	×
10	※	※	○	22	×	○	×
11	※	※	※	23	×	○	○
12	※	※	○				

り，すでに知っている（既報の）事実であったにもかかわらず，その解釈は多様化した[9]．

全体的傾向としては，倒置文よりも修飾・被修飾語連結文の方が意味判断が区々になっていることが観察されるが，ここで用いた文は，体系的に整理されたものではないので，こうした文とその解釈の多義性とから，日本語文のあいまい性に関する形や性質を吟味することは，まだ無理である．

従って，ここでは文脈（この場合は記事の内容）から切り離された文（ここでは見出し）は，あいまいな性質をもち，理解を困難にする，という極めて当然の結果をえたにすぎない．しかし別の面からこの問題をみると，我々は日常個々の素材は極めてあいまい且つ不完全であるが，これを情況に応じて全体の脈絡の中で適当に（殆んど無意識の内に）補い，構成し，比較的妥当な解釈を下し，理解していることを示している．これは，孤立した素材をある全体的情況の中に埋め込むこと，ある素材を孤立したものとしては扱おうとしない心理

的働きを我々がもっていることを示すものであろうと思われる.

以下において，この問題と関連させて，語句，文などのあいまい性も，多義図形や他の視覚の心理法則と類似した法則に従うか，文の分節化・構造化と思考の分節化・構造化は，あいまい性の視点からどのように理解されるか，あいまい文と文脈との関係は，心理学における共感の問題とどのように関わっているか，あいまい性と意志決定の問題，同義語を用いたあいまい文によるプロジェクティブ・テストの試み，を順に，実験的に取り扱い報告する.

〈注〉

1)　彼らはリンゴを食べている.
　　それらは食べられるリンゴである.
　の2通りの意味にとれる.

2)　Table I. Tweleve basic quantified "two-place" relations, p. 2.
　P.N. Johnson-Laird. On understanding logically complex sentences, *Q.J. exp. Psychol.*, 1969, **21**, 1–13.

3)　P.N. Johnson-Laird, On understanding complex sentences, *Q.J. Psychol.*, 1969. **21**, p. 1–13. の p. 4 上 1～8行の記述より.

4)　Figure 2. The propositions of subjects making the privileged, unprivileged, and other classifications for each from of sentence, p. 7.
　P.N. Johnson-Laird, On understanding logically complex sentences, *Q. J. exp. Psychol.*, 1969, **21**, p. 1–13.

5)　Table III. Mean numbers of departures from the privileged classification times for the eight forms of sentence, p. 8.
　P.N. Johnson-Laird, On understanding logically complex sentences, *Q.J. exp, Psychol.*, 1969, **21**, p. 1–13.

6)　Figure 1. Examples of discrete second order probability distributions, p. 21.
　J. Frank Yates and Lisa G. Zukowsky, Characterization of ambiguity in decision making, *Behavioral Science*, 1976, **2**, p. 19–25.

7)　文①～文⑲の出典
　いずれも朝日新聞の見出し，No. は文の番号，数字は発刊年月日.
　① 1976, 10. 24　② 1976, 10. 16.　③ 1976, 10. 20　④ 1976, 10. 21.
　⑤ 1976, 5. 17.　⑥ 1976, 5. 17.　⑦ 1976, 5. 11.　⑧ 1976, 5. 24.

⑨ 1976, 5. 17.　⑩ 1976, 5. 17.　⑪ 1976, 5. 18.　⑫ 1976, 11. 20.
⑬ 1976, 10. 25.　⑭ 1976, 5. 16.　⑮ 1976, 11. 20.　⑯ 1976, 10. 10.
⑰ 1976, 10. 27.　⑱ 1976, 5. 17.　⑲ 1976, 5. 18.

いずれも，当日の新聞見出しの中から，選んだものである．新聞の特質として，止むを得ない面もあるが，やはり模範的で完全な文を掲載する方が良いだろう．見出し以外の記事にも奇妙な文は多いようである．

8) これまで新聞の見出し文のあいまいさについて言及した人はいないし，新聞投書らんにも苦情の出された例はない．

9) ここではあまり考えずに直観的判断を求めた結果であるが，もしじっくり時間をかけて文意を吟味させた場合には，又別の結果がえられたかも知れない．意味の分解が生じたであろうし，恐らく文解釈は，もっと多様化したものと思われる．

〈参考文献〉

① Chomsky, N. *Syntactic Structures*, Mouton & Co., The Hague, 1962.

② Johnson-Laird, P.N. On understanding logically complex sentences, *Q.J. exp. Psychol.*, 1969, **21**, 1-13.

③ Hörman, H. *Psycholinguistics*, Springer-Verlag, Berlin, 1967.

④ Luce, R.D., Bush, R.R. and Galanter, E.G. *Handbook of Mathematical Psychology*, vol. **2**, John Wiley and Sons. Inc., New York, 1963.

⑤ マルティネ編著，三宅徳嘉監訳，言語学事典，——現代言語学——基本概念51章，大修館，1972.

⑥ 宮城音弥編，心理学，岩波小辞典，第3版，岩波書店，1975.

⑦ 新村出編，広辞苑，第2版，岩波書店，1975.

⑧ 西尾実，岩淵悦太郎編，岩波国語辞典，岩波書店，1963.

⑨ Solberg, K.B. *Linguistic theory and information processing*, p. 315-356. Dominic W.Massaro (ed.) *Understanding Langnage. An Information-Processing Analysis of Speech Perception, Reading, and Psycholinguistics.* Academic Press, New York, 1975.

⑩ 園原太郎，柿崎祐一，本吉良治監修，心理学辞典，ミネルヴァ書房，1971.

⑪ 梅津八三，宮城音弥，相良守次，依田新編，心理学事典，第2版，平凡社，1968.

⑫ 安井稔編，新言語学辞典，研究社，1971.

⑬ Yates, J.F. and Zukowsky, L.G. Characterization of ambiguity in decision making. *Behavioral Science*, 1976, **21**, 19-25.